

Part.1 パラグラフ・ライティング

このパートでは、次の2点の理解を目指す。

- 1) 論理的なドキュメントはパラグラフを基本単位として構成される。
- 2) パラグラフは特定の役割を担ったセンテンスで構成される。

1 パラグラフの構造

1.1 役割

パラグラフは文書（ドキュメント）の最も基本的なパーツである。文意の転換点で改行した結果として「できたもの」ではない。ドキュメントを構成する段階で用意しておくべきものであり、整然と構成された文書であれば、最初からパラグラフの数と個々の役割が決まっている。伝統的なドキュメントの構造は章・節・項の3レベルで形成されるが、この構造のなかでは、パラグラフの集合が「項」、項の集合が「節」、そして節の集合が「章」である。600～1,200字程度の小論文であれば、パラグラフ自体が章に相当する。

一つのパラグラフには一つの役割、すなわち主張が存在する。パラグラフの担う役割の展開が、論の骨格を構成することになる。したがって、パラグラフの配置順序もドキュメントの構成段階で決めておかねばならない。言い換えるなら、ドキュメントの構成を考えるとすることは、必要なパラグラフの役割と配置を決めることだ。

レイアウトの都合により、ひとつのパラグラフを複数に分割することがある。新聞の社説ではしばしば見られる。そのような文書を読むときは、読者側で本来のパラグラフを再構成しなければならない。むしろ、本来のパラグラフを分割するというのは、

あくまでも視覚効果を優先させた結果だ。パラグラフはあくまでも論を構成する最小単位なので、論旨を優先するかぎり分割はありえない。

構成を工夫することにより、パラグラフの大きさを一定に保つことは可能である。むしろ、細かなところまで構成が検討されていれば、結果的にパラグラフの大きさはほぼ一定に保たれるはずだ。執筆時に大きすぎるパラグラフができてしまったときは、構成を微修正することによって、パラグラフの大きさを制御できるのである。レイアウトの都合で分割してしまうと、論理にゆらぎが生じてしまうが、構成を微修正した結果であれば、論理自体をゆがめることはない。

パラグラフを意識するということは、構成を意識することとイコールである。レポートなどを執筆するときには、いきなり文を書くのではなく、まずは構成を練る。必要なパラグラフが判明するまで構成を練る。「はじめにパラグラフありき」ということを忘れてはならない。

1.2 センテンスの種類

パラグラフは3種類の文（センテンス）で構成される。各種類のセンテンスにはそれぞれ固有の役割があり、一つのセンテンスが複数の役割を担うことはできない。ゆえに、一つのパラグラフは最低でも3つのセンテンスを持つことになる。

パラグラフの中核をなすのは、そこでの主張を集約した「トピック・センテンス (TS)」である。TSは「主題文」とか「題目文」ともいわれる。TS以外のセンテンスはすべてTSに付随する位置づけとなる。ドキュメントの構成を練り終え、いざ執筆に取り組むときは、TSをひととおり書き通すのが原則だ。TSさえ明確に書ければ、パラグラフの残りの文を用意することは難しくない。

TSは原則としてパラグラフの先頭に置かれる。論旨を明確にするためには、一般に「重要なことを先に示す」ことが原則である。TSがパラグラフの中核であり、主張を集約している以上、TSを先頭に配置するのは当然のことだ。ただし、表現上の意図によってTSをパラグラフの先頭に置かないことはある。むろんそのためには、あえて先頭に置かないことの明確な理由が必要だ。明確で論理的なドキュメントの執筆を目的とするなら、TSはパラグラフの先頭にかかわらず置くようにする。

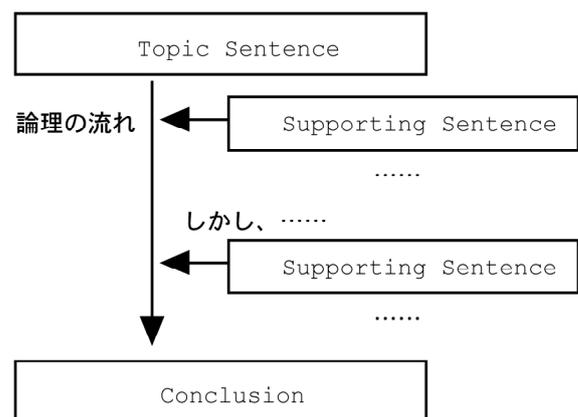
パラグラフの最後に置かれ、意味的にTSと対をなす文が「コンクルージョン (C)」である。Cはパラグラフにおける結論的な内容を示す。パラグラフ内での記述の流れは、TSからCに向かって論旨が展開するという形式になる。むろん、TSがパラグラフの主張を集約している以上、TSとCの内容は一致していなければならない。一般には、TSのあとにさまざまな視点を述べる文を並べることになるので、それらから導かれた形としてCを置く、と考えればよい。

TSとCの間に配され、TSの詳細を説明する文が「サポーター・センテンス (SS)」である。これは「捕捉文」とか「説明文」とも呼ばれる。TS

とCがそれぞれ一つのパラグラフのなかで一つだけであるのに対し、SSの数に制限はない。文意としてTSを否定的に論じるSSがあってもかまわない。重要なことは、パラグラフの主題をTSに、説明をSSに分けて述べることである。

が、TSに対する肯定的な説明文と否定的な説明文とは、それぞれをひとまとめにするのが原則だ。そうしないと、論旨が右往左往してしまい、読み手に混乱をもたらしかねない。

以上の説明からわかるとおり、パラグラフはドキュメントの基本パーツであるが、その中心がTSという文である。ドキュメントを具体的に作成するときは、まず最初にTSを書くことを優先させる。それからSSによって十分な説明をほどこし、最後にCで締めるという順序で執筆することを心がけよう。テキストは冒頭から順々に文を書く必要はない。TSを中心に組み立てていけばいいのである。



1.3 パラグラフ分析による要約

パラグラフと TS を中心にドキュメントを組み立てる方法を逆に用いれば、ドキュメントを合理的に読解できることになる。ドキュメントの基本パーツがパラグラフであることから、ドキュメントの内容はパラグラフ単位で抽出できるはずだ。TS がパラグラフの中心であり、一つのパラグラフに一つの TS がある以上、個々のパラグラフから TS を取り出すことで、ドキュメントの中核的な内容を把握できる。読解の基本は要約だが、要約の出発点は TS を取り出す作業にほかならない。

厳密に構成されたドキュメントは、各パラグラフの最初の文を機械的に抜き出すだけで要約できあがる。実際には TS をパラグラフの冒頭に置かない場合もあるので、つねに単純作業だけで要約できるわけではない。しかし、自身がドキュメントを作成するときは、機械的に要約可能な構成に仕上げたい。簡単に要約できるドキュメントほど、論旨は明快に伝わるはずである。

別な言い方をすれば、ドキュメントを作成するときは、目次、概要、本文の順番で書くのが鉄則だ。目次とはすなわち構成そのものである。そして本文を要約した結果が概要なのではなく、概要に SS を捕捉した結果が本文である。

1.4 演習の視点

「最初にトピック・センテンスを考える」ことを習得するためには、与えられたテーマを 4 つの文で論じる練習を重ねるとよい。論の基本構成は 4 パートから成るので（詳細は次回に解説する）、この練習はつまり、4 つのトピック・センテンスを作ることが目的である。それぞれの課題に対し、現状を集約したセンテンス、問題点を指摘するセンテンス、解決策・議論の方向性などを提案するセンテンス、自分の意見を示すセンテンスを考えてみよう。もちろん 4 つの文は論理的に意味がつながるように書かなければならない。

では、次の課題 1～8 に取り組んでみよう。いずれも時事的なテーマなので、わからない事柄はインターネットの新聞社系 web に掲載されたニュースなどを参考にすること。

(この回おわり)

【演習問題 1】

課題 1：バイオエタノールの普及を促進するべきか否かを論ぜよ。

課題 2：サブプライムローンが世界経済に及ぼす影響を論ぜよ。

課題 3：毒餃子問題をめぐるマスコミ報道の姿勢を論ぜよ。

課題 4：キャラクター「せんとくん」を巡る問題点を論ぜよ。

課題 5：チベット問題をめぐる日本政府の姿勢を評せよ。

課題 6：ガソリンの暫定税率をめぐる自民党・民主党の姿勢を評せよ。

課題 7：橋下府知事の財政政策をめぐる姿勢を評せよ。

課題 8：来年から始まる裁判員制度の問題点を論ぜよ。

2 論の組み立て：論述の積み上げ

2.1 論文・レポート課題の基本型

論文やレポートの課題には、いくつかの型がある。たとえば戸田山（2002:54）は、次の2×2のタイプに類型化している。

- (i) 報告型の課題
 - (a) 読んで報告するタイプ
 - (b) 調べて報告するタイプ
- (ii) 論証型の課題
 - (a) 問題が与えられた上で論じるタイプ
 - (b) 問題を自分で立てて論じるタイプ

（出典：戸田山和久『論文の教室』NHK 出版協会、2002）

たしかに報告型と論証型とでは、論の組み立て方や執筆における作業の優先順位が異なる。論としての基本はおなじであっても、報告型であれば、事実関係の収集と整理に重点が置かれる。論証型であれば、問題を明確に提起することが重要であり、問題提起を中心に現状分析や仮説の設定などを試行錯誤する。したがって、論文やレポートを執筆するときの構成も異なってくる。

構成を検討するうえでは、報告型と論証型の二分類が基本である。戸田山が示した細分化のレベルは、論の組み立て方には無関係である。これは演習などでの課題の種類に対応したものだ。

他方、論証型は論述を積み上げるタイプと意見の対比のなかで根拠を示すタイプとに分類できる。論述の積み上げとは、事実や分析をひとつひとつ積み重ねて主張を裏付けるものである。それに対し、意見の対比タイプは対立する主張や支配的な主張、暴論・極論などのなかに自分の主張を位置づけ、自説の正当性を浮かび上がらせていく形式だ。論を組み立てる以上、「問い」と「答え」の反復を繰り返す点はおなじだが、論文やレポートの具体的な構成を考える段階では、タイプによって異なってくる。

論の組み立てという視点からは、論文やレポートは次の三つに類型化できる。

- | |
|-----------------|
| (i) 論証型：論述の積み上げ |
| (ii) 論証型：意見の対比 |
| (iii) 報告型 |

ただし、実際に論文などを執筆するときには、これらのタイプのどれか一つで決着がつくわけではない。あるパートでは意見の対比をおこなう必要があるだろうし、そのなかのサブパートのいくつかは報告型の展開が必要になるかもしれない。大きな論を組み立てるときは、これらのタイプを重層的に組み合わせていく必要がある。ここに示したタイプは、あくまでも基本型として覚えておくべき型である。

以下、この基本型を示してみよう。

2.2 論述の基本4パート

なにかを論じるときの基本は、設定した問題に論証を加えて結論に導くことである。これは論文であろうと報告書であろうとおなじだ。章立てによって細かな構成に違いが出てくることはある。しかし、その基本線にかわりはない。問題設定の明確さ、検証の的確さが論の構成には不可欠だ。

どのようなテーマであれ、論の内容は次の4つのパートで構成される。

現状分析	：問題をとりまく背景と現状
問題提起	：設定された問題の詳細
主張	：証明すべき主張（仮説）とその根拠
総括	：論の総括と意見

現状分析と問題提起によって論ずべき問題を明確に設定する。問題提起とはすなわち、テーマに関して論者が注目する問題点を示すことにほかならない。しかし、なにかが問題であるのかを示すには、現状の批判的な分析が不可欠である。逆に、提起する問題があってはじめて、現状分析をするべき対象が決まる。現状分析と問題提起とは一組のものであり、実際の執筆作業では、両者のあいだを行きつ戻りつしながら作文することになる。

主張パートでは、提起された問題に対する執筆者の主張を論証する。もちろん論者の一方的な主張のみを書き連ねても、読み手に対してなんの説得力も持たない。論を成り立たせるためには、主張に対する根拠を論理的に示さなければならない。

総括パートでは、それまでの総括として現状と問題をまとめ、自分の主張を再確認する。この部分では、あたらしい事実や分析を加える必要はない。主張の裏付けは、前のパートで終わらせておくのが基本だ。結論部分で述べることは、主張の意義、場合によっては自分の主張だけでは解決しきれない課題、今後取り組むべき事柄などである。総括パートの最大の役割は、主張の意義や位置づけを明確に評価することだ。

2.3 パラグラフ構成との対応

構成がきちんと練られた小論文は4パラグラフとなる。一つのパラグラフには一つの役割があり、論が4つのパートで構成されているのであるから、各パートごとにパラグラフを立てるのが基本だ。つまり、現状分析、問題提起、主張、総括を示すTSが小論文の土台となる。

ここで例をひとつ示してみよう。論ずべき事柄の背景として、お腹がすいて仕方がなく、いまずぐにでも食事を取りたい状態なのに、出席しなければならない授業が始まってしまった、という状況があったとする。この問題背景に対し、腹が減ったのなら食事を取ることを優先させるべきだという主張をしたい、と仮定する。背景と主張、基本構成に対応するTSはp.6に示したようになる。

*

小論文の場合、基本構成を提示する順番を意図的に変更することが可能だ。基本はあくまでも（i）現状分析から（iv）総括の流れに沿った展開である。しかし、みずからの主張を強調したい場合、（iii）主張→（i）現状分析→（ii）問題提起→（iv）総括という順番も可能である。とりわけ逆説的な事柄を主張したいときは、主張を先に出したほうが読み手の関心を引けるだろう。また、その際に現状分析と問題提起を一体化し、主張パートの分量を増やすこともできるだろう。構造さえ明確に築かれていれば、文章表現面では多少の工夫が許されるのである。

2.4 論文への展開

論文の基本構成は序論・本論・結論である。実際の章立てはテーマによっても執筆者の方針によっても異なってくるが、大枠はこの3パートで構成されるのが基本だ。この構成は論文一般に適用される書式なのである。

論の基本4パートとの対応は次のとおりだ。

序論：現状分析・問題提起、主張の概略
本論：現状分析、問題提起、主張の詳細
結論：総括

論文の書き方の詳細は、別の項目であらためて述べることにする。とりあえずこの時点では、小論文の構成はそのまま論文にも適用できること、そして序論がそのまま小論文形式で記述できることを知っておこう。

(この回おわり)

パラグラフの構成例

背景：空腹状態なのに授業が始まってしまった。

主張：授業を抜け出してでも食事に行くべきである。

ここから現状分析→問題提起→主張の流れを考える。腹が減ったという現状のもと、食事に行きたくても行けないという問題が存在し、それに対して授業を抜け出してでも食事に行くべきである、と主張する展開が考えられる。最後は即断即決が重要という評価で締めくくってみよう。

基本構成ごとの TS

【現状分析】腹が減った

【問題提起】いまは食事に行きたくても行けない

【 主張 】 授業を抜け出して食事をとりに行くべきだ

【 総括 】 悩んで時間を無駄にするよりも即断即決が重要だ

このように作成された TS をもとにパラグラフを仕上げる。TS に対応する C、TS を補強する補足説明や理由などを列記し、論旨を精密化すると、次のような「原案」ができあがる。

■腹が減った (TS)

・朝から何も食べていない (SS：理由)

・腹がグーグー鳴っている (SS：捕捉説明)

→いますぐにでも何か食べたい (C)

■いまは食事に行きたくても行けない (TS)

・授業に出席しないといけない (SS：理由)

・授業中にモノを食べるのは禁止されている (SS：理由)

→このままでは空腹はいやされない (C)

■授業を抜け出して食事をとりに行くべきだ (TS)

・空腹のままでは集中して授業を受けられない (SS：理由)

・さいわい、授業中に抜け出すことは簡単だ (SS：理由)

・早く行くほど早く教室に戻れる (SS：理由)

→食事を終えたら教室に戻ればいいではないか (C)

■悩んで時間を無駄にするよりも即断即決が重要だ。(TS)

・行くかどうか悩むのは問題の先送りにすぎない (SS：理由)

→しょせん、人間は食欲には勝てないものである (C)

【演習問題 2】 p.3 に示した演習問題 1 を用い、背景・主張、TS を考えてみよ。

3 論の組み立て：意見の対比

3.1 意見の対比

意見を提示するときには意見の「対比」に留意しなければならない。論の基本4パートにおける主張パートでは、なんらかの意見表明がかならず求められる。その論拠を示すうえでも、意見の対比は重要な切り口となる。また、意見を求めるタイプの小論文では、意見の対比をもとにパラグラフ構成を考えたほうがいい場合もある。意見の対比を示すことは、分析のひとつと考えてかまわない。

意見の対比とは、[正]の意見に対して[反]の意見を組み合わせることだ。正・反の実際の内容には、たとえば次のようなパターンがある。どのようなテーマであれ、こうした組み合わせをつねに考える必要がある。

[正] 支配的な意見	[反] 例外的な意見
[正] 多数意見	[反] 少数意見
[正] 肯定的な意見	[反] 批判的な意見
[正] 常識的な正論	[反] 突飛な暴論
[正] 穏便な提案	[反] 過激な提案
[正] 保守的な意見	[反] 急進的な意見
[正] ローリスク案	[反] ハイリスク案
[正] 同情的な意見	[反] 冷淡な意見
[正] 現状維持	[反] 心機一転
.....

これ以外の組み合わせも考えられるだろうし、複数のパターンを組み合わせたパターンもありうるだろう。そもそもどういふパターンを考えるか自体にも、分析の視点が込められている重要なことは、意見の社会的文脈を意識すること、どのような意見だろうとも、別の視点からの「反論」が存在することを明示することだ。正・反の組み合わせを検討すること自体が、重要な考察のひとつである。

3.2 自説の位置づけ

自説を提示するとき、対比すべき意見は三種類ある。正・反それぞれの意見および自分の意見である。この三つの意見の相互の関係を明らかにすることにより、自分の意見の位置づけを明確にできるのだ。場合によっては、自分の意見は正または反のいずれかに重なるかもしれない。たとえそのような場合であっても、自分の立つべき位置を示すことができる。意見に説得力を持たせるには、自分の意見プラス正・反の意見の組み合わせが必要なのだ。

3.3 意見表明の基本4パート

意見表明を目的とする小論文であれば、次の4パートが構成の基本となる。

- | | |
|--------------|-----------------------|
| (i) 現状の批判 | : 課題の背景、現状、対応すべき問題点 |
| (ii) 意見 [正] | : 問題に対する肯定的な意見、多数意見など |
| (iii) 意見 [反] | : 問題に対する少数意見、逆説的意見など |
| (iv) 自分の意見 | : 自分の意見とその根拠 |

これは論の基本4パートの変形である。(i) 現状の批判は、論の基本4パートの現状分析と問題提起をあわせたパートである。そして(ii)から(iv)で記述する内容は、意見の対比という形式を用いて主張とその根拠を示すものであり、それに加えて自分の意見を総括として表明する。論の構造はおなじでも、示し方が異なるにすぎない。

意見表明の4パートに基づく記述をおこなうときは、この(i)～(iv)の順におこなうのが基本である。しかし、構造さえ明確であれば、順序を変えることは表現上可能だ。最初に現状の批判を置き、自分の意見を最後に提示するというのは、たしかに

筋道だった記述ではある。しかし、意見自体のアピール力は弱い。意見表明の場合、読み手に対する印象を強くするために、あえて意見を冒頭に掲げるという方法もありうる。要は、書き手が意見をどのようにアピールしたいか次第だ。

意見を強くアピールするときは、(i + iv) → (ii) → (iii) → (iv) という組み合わせが効果的である。この場合、自分の意見が正・反いずれとも大きくは重なっていないことが必要である。また、(ii・iii) パートでは正・反いずれの意見にも問題があることを明示しなければならない。当然ながら、自分の意見の独自性・正当性を示せなければ、このような展開は逆効果になってしまう。逆に、それを示すだけの根拠があれば、意見を冒頭に置くことで説得力を強めることが可能だ。この展開は、自説に自信があるときの方程式といえよう。

(この回おわり)

【演習問題 3】 意見の対比形式で論ぜよ。

- 課題 1 : 福田総理は北京五輪の開会式に出席すべきか。
- 課題 2 : 成人年齢を 18 歳に引き下げる意味があるのか。
- 課題 3 : Web のフィルタリング機能は必要か。
- 課題 4 : 児童ポルノの単純所持を法規制したほうがいいのか。
- 課題 5 : 道路特定財源の一般財源化は実現できるか。
- 課題 6 : 後期高齢者医療制度を撤廃すべきか。
- 課題 7 : 日本の CO₂ 対策は世界レベルでみて進んでいるか。
- 課題 8 : 私立大学の学費は適切な水準といえるか。

4 論の組み立て：報告型

4.1 基本3要素

報告型論文・レポートを記述するときに最も留意する点は“FAO”とよばれる3要素の区別である。このタイプの論文・レポートでは、自分が調べた事柄、調査結果をもとに分析した事柄、考察した結果たどりついた意見などを記述する。なにが事実でなにが意見なのかを区別しておかないと、報告内容が正確には伝わらない。逆に、この区別を意図的にあいまいにした表現が、一般には「詭弁」と呼ばれるレトリックの代表例だ。論述型でも意見対比型でも同様だが、正確に記述するためにはFAOの区別は不可欠である。

FAOとはすなわち次の3要素である。

“F”要素：客観的な事実 (Fact)
“A”要素：事実にもとづいた分析 (Analysis)
“O”要素：自分自身の意見や感想 (Opinion)

たいていの論文ノウハウ本では「事実と意見」の区別を明確にするようにと書かれている。客観的な裏付けが必要な「事実」と、主観的な事柄の表明すらも許される「意見」とでは、たしかに区別が必要なのは明白だ。そして論の組み立てにおいては、根拠のない一方的な意見表明を排除するのが当然の態度であるから、意見イコール理論にもとづいた合理的な結論、すなわち分析結果と見なすことができる。つまり、FAOのうちのAとOを一つの要素としてとりあつかうのだ。

しかしここでは、AとOを分けておくことにする。もちろんそれは、論のなかに根拠のない意見を書くことが好ましい、と指摘したいのではない。執筆者の思い入れや根拠なき意見は論文・レポートにおいては無用の「雑音」にすぎない。しかし、そのような内容を除いたとしても、今後の予想を述べたり政策的な提言をおこなう場合に、執筆者本人の主観を

完全に排除するのは不可能である。総括するパートにおいては、執筆者の意見表明を限定的にはあるが認めるべきだ（と私は考える）。

FAOの区別を理解するために、ひとつの例をあげて説明してみよう。たとえばテーマパークの利用状況を調査したとする。事実・分析・意見の違いは次のような形であらわれてくる。

- ・終日一時間以上の待ち行列ができていたアトラクションが複数存在した。【事実】
- ・年平均を5割以上うわまわる来場者がいたことが、一時間以上の待ち行列を複数のアトラクションで終日発生させた原因であると考えられる。【分析】
- ・すいているアトラクションを探したほうが賢明だと私は考える。【意見】

この例で事実・分析・意見の違いを説明しておこう。まず、観察者が誰であろうと、営業時間内を通じて一時間以上待たねばならないアトラクションの存在を確認できる。ゆえに最初の文は「事実」を示している。そして2番目の文は、入場者数と一時間待ちのアトラクションの数とを統計的に解析すれば導きだせる事柄なので、「(事実にもとづく)分析」とみなすことができる。そして最後の文の場合、「賢明」か否かは論者の価値判断にもとづくことなので、「意見」に分類される。

FAOの区別があいまいな報告書は、場合によっては読者を誤読に導いてしまう。2番目の文の場合、厳密には、解析の方法と妥当性の確認が必要である。一読かりに「……原因だ」というように記述しても、文意を大きく損なうことにはならない。しかし、このような内容を分析としてなりたせするには、第三者に検証可能であることが大前提なのだ。そうした検証のもとに成り立つ事柄であることを示す意味で、事実とは区別した表現を心がけたい。意見と事実との区別については、すでに指摘した。

4.2 報告の基本4パート

FAOの区別を明確にするには、報告書自体を基本要素ごとにかけてしまうのが最も合理的な構成である。報告対象となる調査（あるいは研究）の問題設定は当然必要なので、それを含めて次の4パートが基本となる。

- (i) 概要：調査の目的、対象、方法の説明
- (ii) 結果：調査で得られた事実の整理（F中心）
- (iii) 分析：事実にもとづいた分析（A中心）
- (iv) 考察：分析結果の総括（AにOを添付）

これは論の基本4パートの変形である。(i) 概要と(ii) 結果をあわせたものが現状分析プラス問題提起である。調査の目的が問題提起にほぼ相当する内容だ。(iii) 分析は主張に対応し、(iv) 考察は総括そのものである。論を形成する以上、内容的な展開は論の基本4パートと一致するのは当然だ。

4.3 基本三要素と文体

FAOは文体によって区別をつける。通常、文末は次のように表現する。

- (i) Fの文 「だ・である」調で言い切る。
- (ii) Aの文 「……と考えられる」のように受動態表現を基本とする。
- (iii) Oの文 「……と（私は）考える」のように意見の主体を明示し能動態で表現する。

事実は推測の余地が存在しないのだから、「だ・である」で言い切る。「……であろう」「……のようだ」といった推測を示唆する表現は不自然だ。不確定の部分が存在するときは、断定できないという事実を明確に表現すべきである。また、「です・ます」調のていねいな表現は論文・レポートでは習慣的に使わない。事実の記述では「だ・である」で表現すると覚えておこう。

分析をあらわす文では「……と考えられる」と受動態で表現する。「……と考える」と記述した場合、「考える」主体は執筆者自身だ。このような文は書いた人の主観を示したと解釈できてしまう。分析である以上は、誰が考えてもおなじ結論になるはずなので、このような解釈はさげなければならない。「……と考えられる」という表現は、「誰もが……と考える」の受け身のかたちでもあるが、英語（One thinks that ...）やフランス語（Il pense que ...）ならともかく、日本語の論述では「誰もが……と考える」という表現を客観的分析の文にはあまり使わない。ゆえに、主体を省略可能な受け身の表現によって客観性を示唆するのである。

意見の提示では、「（主体）は……と考える / 推測する / 提案する」のように、主体を明示し行動を能動態で示す。意見では、誰が主張するのかも重要なメッセージとなるので、主張の主体を明示しなければならない。そして主体＝主語に対応する結びの語で文を終える。

一般に、論説文やコラム、エッセイなどでは、いちいち「私は……と考える」と示して意見を述べる文のほうがむしろ少ないかもしれない。もちろん、「……であるべきだ」「……でないのはおかしい」「……は納得できない」という文は、本来であれば「……であるべきだと私は考える」「……でないのはおかしいと私は思う」「……は納税者の一人として納得できない」と表現するのが原則である。にもかかわらず意見の主体を略す文が好まれているのは、主体が明白である場合には、あえて文中で明記しなくても意味が通じる日本語の特性がひとつの理由で

あろう。また、「だ・である」で結んだほうが、文としての歯切れの良さを表現できることもおおきな理由のひとつと考えられる。実際、読み手がFAOを意識すれば、それが事実なのか意見なのかを区別するのは可能だ。

しかしそれは、一般読者の多様な読み方を前提とした論説文などだから許容される表現手段である。正確さが最優先される論文・レポートでは、FAOの区別は厳密におこなわれなければならない。意見であればかならず主体を明記するのが鉄則だ。(この回おわり)

【演習課題 4】

以下の文は、いずれも「事実のように書かれた意見」である。どの部分が「意見」の原因となっているのかを示し、あらためて事実・分析の記述として書きかえてみよ（細かなデータなどは推測値や仮定の値でかまわない）。

課題1：福田総理はサミット明けに大規模な内閣改造を計画している。

課題2：洞爺湖サミットは夏に北海道で開催される。

課題3：北京オリンピックは史上最大規模のオリンピック大会になりそうだ。

課題4：中国本土の聖火リレーは波乱なく進行している。

課題5：アメリカの株式市場はサブプライムローン問題が原因の混乱が続いている。

課題6：DS版ドラクエ5の発売日が迫り、ファンの興奮がますます高まっている。

課題7：ドラクエは男の子向け、FFは女の子向けのゲームだ。

課題8：ドラクエは3作目が最もおもしろい。

Part. 2 クリティカル・リーディング

1 読解の方法

【事例】別添テキスト

2 電話と変容する空間

- 住居に浸透する電話
- 都市に拡散する電話

【方針】

章・節・項の構造に沿って文を構造的に編集する。章・節・項の見出しも文章化する。そのためには、パラグラフ単位でTSを抜き出すだけでなく、SSやCに含まれる補足的な事柄や内容的な方向をTSに加えることを目指す。つまり、パラグラフの内容を集約する文を、自分の言葉を使って作成する。

パラグラフ単位で作成した文をもとに、次は項レベルの内容を集約した文をひとつ作成する。その内容は、項の見出しに対応して考える。項レベルでおこなったこの作業を、次は節、そして章レベルで実行する。最終的に、意味が構造的に関連づけられた一群の文が作成されるはずだ。

■住居に浸透する電話

- ・電話は家族ひとりひとりを外部に接続するがゆえに、人びとは電話を共同空間の境界に置いた。
- ・電話を日常的に利用するにつれて電話は家族の個室に移動した結果、住居は電子空間的には個室レベルで分解した。
- ・電話コミュニケーションの個室化傾向は、80年代における電話に対する社会的イメージの変容と結びついている。
- ・家族を直接外部に結ぶ電話が家庭内部に浸透することは、一家の団らんに象徴される、家庭に成立すべきリアリティをゆらがせる。
- ・家庭内で電話がもたらすコミュニケーションは、対面的場面と電話の会話という「あいいれない世界」の重なりをもたらしてしまうのだ。

→家庭内にいる個人を外部に接続する電話が住居に浸透した結果、住居は電子的には個室レベルに分解し、対面状況にもとづくリアリティにゆらぎをもたらしている。

■都市に拡散する電話

- ・いたるところに存在する公衆電話がプライベート空間的に利用された結果、都市空間でもリアリティのゆらぎが生じている。
- ・移動体通信の普及が進行するにつれ、電話の遍在化が都市空間の全域に広がりつつある。
- ・都市における電話の遍在化は、家庭空間と同様、リアリティの乖離をもたらしている。
- ・電話は身体に密着するメディアとなり、人びとを電子的な空間に配置する状態をつくりだしている。

→電話は人びとの身体に密着する形で都市空間に拡散し、人びとのコミュニケーションにおけるリアリティを、住居空間と同様にゆらがせている。

- ・電話は人びとの身体に密着する形で都市空間に拡散し、人びとのコミュニケーションにおけるリアリティを、住居空間と同様にゆらがせている。
- ・家庭内にいる個人を外部に接続する電話が住居に浸透した結果、住居は電子的には個室レベルに分解し、対面状況にもとづくリアリティにゆらぎをもたらしている。

→家庭の内部においても都市空間においても、電話はつねに個人と個人とを結びつけ、対面状況をベースにしたリアリティにゆらぎをもたらしている。

電話と変容する空間

1 概要

家庭の内部においても都市空間においても、電話はつねに個人と個人とを結びつけ、対面状況をベースにしたリアリティにゆらぎをもたらしている。自分と会話をしていた相手が電話で誰かと話をはじめたとき、その相手と自分とはコミュニケーション空間を物理的に共有する一方、相手は電話先の人物と電子的なコミュニケーション空間を共有する。ここにリアリティの乖離が生じるのだ。

2 家庭に浸透する電話

電話は家族を外部の他者に接続する。ゆえに電話は外部からの訪問を媒介するメディアとして、玄関口のような共同空間の境界線に置かれた。ところが、電話の利用が日常化するにつれ電話は個室に移動し、電話のコミュニケーションにおいて電話は住居を個室ごとに分解した。住居という空間では、家族の団らんに代表されるような、家族どうしの対面状況のコミュニケーションが交わされていた。そこに電話が侵入した結果、電話に出る者は外部の他者と接続される状況が発生する。すなわち家庭内に、あいられない異なるコミュニケーション空間が重なりあうことになるのだ。

3 都市に拡散する電話

都市空間のなかにも公衆電話がいたるところに設置され、プライベート空間が割り込む形となり、リアリティの乖離をもたらしている。このゆらぎは移動体通信の普及によって拡大する。移動体通信によって電話は身体に密着し、対面状況という物理的に共有するコミュニケーション空間と、電話による電子的な空間との乖離を生じさせているのだ。

4 まとめ

対面状況では、コミュニケーションの対象は、いまその場に存在する存在する相手に限られる。しかし、電話が家庭の内部に浸透し、あるいは都市空間のあらゆる場面に存在するようになると、各個人がコミュニケーションをはかることのできる相手は、その場にいる必要性はない。